

様式③

提出日 2020年 1月 17日

2019 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「石垣市の子どもの貧困のサポートするところについて」

氏名：稲福 高菜 當眞 緋奈乃

所属学部学科：人文学部 子ども文化学科

I. 初めに

私たちは、将来子どもの携わる職業につきたいと思っている。授業などで学校のことなどを学んでいるが、他の子どもと関われる職業はなにかないか気になった。そこで、子どもの勉強を教えている塾や、貧困の世帯への食事の提供、一時的に預かってくれる学童のようなサポートをしているボランティアの参加の案内があったのだ。私たちのうちの一人はその沖縄本島のボランティアに参加してみたのである。そこで、沖縄本島ではなく、沖縄の離島では、どのようなサポートをしているのか、どのような子や親がいるのか気になったのが始まりだ。

II. 研究の目的、動機

私たちは大学を卒業すると、子どもに携われる職業につきたいと思っているので、教員という職業のほかにもどのような職業があるのか気になったのである。また、沖縄本島ではなく、沖縄の離島では貧困の世帯のサポートをしてくれているところはどのようなところであろうかと、気になったからである。

III. 研究方法、地域、期間

研究方法 石垣市大川の子どもホッ！とステーションでの聞き取り調査

地域 石垣市大川

期間 2019年9月2日～4日

IV. 結果

○石垣市の子どもの貧困のサポートしてくれるところ

- ・子どもホッ！とステーション(石垣市字大川)

開館曜日 月曜日～金曜日 月に一回土曜日と日曜日

石垣市の調査で貧困や虐待、一人親などに認定された人だけ入れる

- ・子どもホッ！とステーション未来塾(石垣市字登野城)

開館日 火曜日、水曜日、木曜日

中学生以上の子ども

- ・石垣市子どもセンター(石垣市字登野城)

開館日 月曜日～土曜日

自分で簡単に入れる

- ・まきら子どもホッ！とステーション(石垣市字新川)

開館日 月曜日～金曜日

自分で簡単に入れる

○子どもホッ！とステーション(石垣市字大川)について

石垣市の委託でやっているところである。石垣市の調査で、貧困や虐待、一人親などに

認定されないと入ることの出来ないところである。ここは、定員が35人で、今は33人の子がいる。その中で、22人〜23人の子が来ている。ここを利用してもよいと判断されたのに、まだ顔を見たことのない子もいる。ここに入れる人は、小学一年生から中学三年生までだ。また、ここを利用する人は、自己負担は一切ない。ここは、今100%国からの補助金で運営されている。しかし、あと3年後にはその補助金は打ち切られるので自主運営をしないといけなくなる。

○子どもホッ！とステーション(石垣市大川)の子どもの一日

学校が終わるとステーションの人がバスでお迎えに来る。そして、宿題をして、バドミントン、縄跳びなどをして遊ぶ。その後、夕ご飯を食べ、お風呂もステーションで入り、洗濯までする。20時過ぎにステーションの人が、自宅までバスで送り届ける。

○子どもホッ！とステーション(石垣市大川)の職員について

職員は、正社員4人、パート5人の合計9人である。社会福祉士と言語聴覚士もいる。しかし、資格はない。去年までは、ステーションの人は直接親や学校に連絡ができなかったのだ。石垣市のコーディネーターを通してからではないと、親や学校には連絡ができなかったのである。今年からは、ステーションの人が、市のコーディネーターや親、学校に直接連絡ができるようになったのである。これからは、もっと専門家とも話したりして連絡を取り合い一緒に考えていきたいとあった。

○大変なこと

体力的に一緒にのレベルで遊べないことだ。一緒にサッカーやバドミントン、縄跳びは体力的に厳しくて大変だという。

○よかったこと

学校や自分の子とは違って、濃く深く話せることだそう。また、子どもの喜怒哀楽を味わえることだそう。

○困ったこと

今は元保育園の場所を借りてやっている。しかし次は市の保育園の場所二年間はやれる予定だがそのあとは決まっていないことだそう。

○学校の先生に求めること

ステーションに来ている子は、学力が平均より低めなので学校、ステーション、家で同じ方法で連携して取り組んでいけたら、よりよくなると思うので、連携出来たらいい。

V. 考察、分析

私たち沖縄は貧困率が高いと言われているが、それは沖縄本島だけで観光客数が世界一の石垣島ではそんなに高くないのではと思っていた。しかし、実際に石垣島へ調査を行ったところ、石垣島には数多くの観光客が来るが、県外企業のお店が多く石垣島も沖縄本島と同じように、貧困率が高いことに驚いた。県外企業のお店が多く石垣島に直接お金が入るのは少ない。その結果石垣島も本島と同じように、貧困率が高いことに驚いた。また、今回の調査で、石垣島には子どもの居場所作りの必要性があると強く感じた。貧困世帯の子どもたちに食事の提供や学習支援、生活指導などを行う居場所作りは子どもたちが成長していく中でとても重要なことである。そんな重要な役割を果たしてくれている居場所作りが3年後には国からの補助金を打ち切られてしまう。継続していくためにはご飯は近所の人から分けてもらったり、畑を利用し足り場所の確保など、地域の人との協力がより求められると感じた。

VI. 今後の展望

この調査で、子どもをサポートしているところを行ってみて、学校、家、サポートするところの連携があつたらもっとよりよくなると思ったので、もし子どもと関わる職業に就いた時にも連携を意識していきたいと思った。また、本島の子どものサポートをしてくれるところにも訪れてみたいと思った。

VII. 終わりに

今回のこの調査で、石垣市の子どものサポートするところを知れたし、ここに携わっている人は親などへの連絡などでとても忙しそうに思えた。また、子どもをサポートするには、いろいろな人との連携が必要だと感じた。

VIII. 参考文献、調査協力

調査協力 子どもホッ！とステーション 代表 大濱さん

参考文献 www.okinawa-child-future.jp/work/

IX. 指導教員コメント

本研究を通して貧困の問題が沖縄本島だけの問題打破ないことを確認できたのは、本人たちにとって良かったことである。また、具体的に、石垣島における子どもをサポートする体制の実態の一端が明らかにされたことは、成果である。この研究からさらに沖縄全体の調査研究に進むことを期待したい。